



柳菴栗原氏校訂

重修

真書

太閤記八編

都書肆

知新堂發兌



重修真書太閤記八編總目錄

卷之一

森勝藏小田切口亂入の事

并上杉家諸將水中防戦の事

卷之二

森勝藏上杉家を破る事

并上杉方諸將大敗軍の事

遠藤但馬守智謀の事

并登坂安田等勇戦々死の事

卷之三

大閤記八編目錄

上杉景勝魚津表歸陣の事

并馬淵浮見又傷始末の事

柴田勝家遠謀を用ゆる事

并溝口半左衛門使節の事

卷之四

魚津城中諸將會合の事

并中条越前守軍慮の事

勝家謀城中へ來込事

并越前守軍慮相違の事

卷之五

佐々内藏助本丸を焼事

并吉江龜田等信義討死の事  
竹股中条猛戦自害の事  
并魚津落城宮崎勢後詰の事

卷之六

龜田小三郎老母自害の事

并光秀逆心北國へ聞ゆる事

柴田勝家歸陣の事

并上杉勢勝家を追事

卷之七

諸將清洲の城に會合の事

并柴田佐久間内謀の事

秀吉理言諸將感伏の事

并勝家長濱所望の事

卷之八

瀧川一益柴田勝家合の事

并秀吉堪忍の事

秀吉光明皇后の譬の事

并柴田密計下知比事

卷之九

秀吉長濱を柴田へ引渡す事

并森長一人質を殺す事

信長御法事招状の事

卷之十

并勝家一益旅宿相談の事

紫野大徳寺法事執行の事

并焼香前後争ひの事

附秀吉孝忠を論ずる事

卷之十一

瀧川兩虎相争計策の事

并一益勝家を計る事

瀧川一益奸計の事

并諸將會合の事

卷之十二

勝家秀吉を討んとを謀る事

并一益勝家を諫る事

柴田龍川以下諸將歸國の事

并信長公葬式行列の事

卷之十三

龍川柴田内謀を定る事

并不破原前田金森上京の事

勝家和平を望む事

并秀吉返答の事

卷之十四

前田利家時運を考ふる事

并長九郎左衛門尉諫言の事  
長九郎左衛門尉由緒の事  
并長谷部信連化事

卷之十五

隠亡浦右衛門由緒の事

并長九郎左衛門尉枕膳祝義の事

大谷慶松長濱へ来る事

并神谷木下伊賀守を諫る事

卷之十六

柴田伊賀守秀吉と一味の事

并秀吉諸方年禮の事

信孝籠城三臣忠諫の事  
并秀吉濃州表進發の事

卷之十七

柴田龍川出張延引の事  
并信孝偽く和平を望む事  
秀吉濃州歸陣の事  
并佐久間玄蕃柴田伊賀守を諫る事

卷之十八

信孝北國へ牒合と籠城の事  
并柴田伊賀守病死の事  
美濃守秀長岐阜を圍む事

并信孝柴田の援兵を望む事

卷之十九

柴田勝家軍勢催促の事  
并前田父子密意を残り出陣の事  
前田孫四郎先陣を望む事  
并北國勢會合進發の事

卷之廿

秀吉勢州表進發の事  
并龜山落城龍川勢戦死の事  
龍川小旗不思議の計の事  
并峯の城一封の書翰退去の事

卷之廿一

龍川從來名逆寄の事

并中川瀬兵衛奮戦の事

長岡忠興中川を救ふ事

并龍川勢敗走戦死の事

卷之廿二

於次九秀勝衆名發向の事

并龍川夜討軍配相違の事

秀吉謀之龍川を圍む事

并龍川主從來名退去の事

卷之廿三

卷之廿四

秀吉賤ヶ嶽出陣備立の事

并双方先陣手分合戦の事

秀吉物見軍慮の事

并賤ヶ嶽砦所々普請の事

秀吉賤ヶ嶽砦人數配の事

并秀吉密々濃州より歸陣の事

信孝二度援を勝家よ乞事

并勝家謀計宇野ヶ事

卷之廿五

宇野忠左衛門山路將監を誘勸事

并山路將監反心の事

山路將監今井野村を試むる事

并今井野村使節の事

卷之廿六

今井角左衛門尉内通の事

并山路將監北越の陣へ馳込事

秀吉山路妻子刑罪の事

并山路佐久間軍談の事

卷之廿七

佐久間中入之謀術を述る事

并勝家玄蕃が血氣を止る事

卷之廿八

乘山羽柴中川を諫る事  
并越前勢中川が陣へ寄る事

中川主従勇戦の事

并神戸中川が陣を焼事

中川頼兵衛戦死の事

并佐久間凱歌不吉を示る事

卷之廿九

高山右近開柵諸里震動の事

并黒田官兵衛深慮の事

黒田長政孝心勇氣の事



并嶋左近智謀斥侯の事

卷之三十

嶋左近一騎大垣へ注進の事

并佐久間驕勇三士不快の事

黒田主從賤ヶ嶽援兵の事

并後藤又兵衛佐久間を謀る事

重修真書太閤記八編總目錄終

重修真書太閤記八編卷之一

森勝藏小田切口亂入の事

并上杉家諸將水中防戦の事

爰は信州更級の領主森勝藏長一と三左衛門可成の嫡

子に今年天正十年ハ廿六歳あり遠藤大隅守胤基ら

六郎左衛門尉胤縁乃長男美濃侍の中小就と尤武遣化

老武者あり森と信州小在て万事と監察と

と信長とりつけ仰られり今度の軍も別て大事と

心を盡し出張と也森が軍勢三千七百餘騎川中嶋

を打立と犀川をさしり小市大久保を過飯繩の山麓

より野尻の湖の下流より従ひ關川口に打と入小田切ハ  
陣を取上杉方より切つて期したるに於て安田總八  
山右衛門尉を先鋒とあり中軍ハ登坂刑部少輔安田筑  
前守蠣崎彌五郎以下二千餘騎後陣ハ新津丹後守小田  
切口の川より東北に陣を張るに終をむくむ織田  
方に在り森が長臣各務伊織落合右衛門を先陣と二  
の手ハ森勝藏長一を中と大塚主税森永女左右に連  
きて雁行少くあり後陣ハ遠藤大隅守長蛇の備を立  
嚴重に陣をさる小荷駄ハ伴久左衛門尉是を奉行して  
川手に付て備えたり上杉方より森が軍立ちのりて  
たゞ並々合戦したらん少ハ勝利を得るをあらん

切つて川を渡して軍をくいと逸雄の若りのど  
も既ハ馬を打んとあり切つて折しも五月下旬の  
とをんる雨あがり降とハす終ど川氷さして高からば  
わくる處へ新津丹後守安田筑前守馳來り川を前ハ當  
たる軍場ハ敵ハ川を渡せ半渡へ亂ちりつとてあそ  
勝利をあらわれ斯る舉動はからばと諫めしに  
より先手ハ進みりれ共馬の鼻を引返り理ある物を  
あの二人ハ謙信の旗本ハ在て度々の戦場を經武篇場  
數の古兵あり果して若手のめはる新津安田ハ諫めら  
せ志を了見合をりるを織田方にて上杉方とや引色  
あたるのりる此勢ハ乘但ひと揉より崩ちるとひ

めきさるうりて思慮りあく川へ颯と打入打入流をせん  
 たり渡りけり各務伊織落合右衛門ハ上杉方の景氣を  
 見ろふさあがり引とも思われ若や敵の謀りと心元  
 あくありひつせむ打寄て是を見ろふ先陣をせよ渡り  
 わけと引返せむさ勢ありあふ孫ハ是非あく川へ珠込  
 たり上杉方にせん新津安田諫ハ從ハ先鋒の若者ども  
 東の岸ハ打上敵の寄りを長目居たり登坂刑部少  
 輔彌崎彌五郎ハ織田方の人數大りと川を渡ると見え  
 せしめ筒先をせり胸勢をせりわけ一度ハ放ちわけ  
 せり川の中はせんあり前後の次第合期をせりあそてふ  
 たりき散々ハ打立られ水ハあがりくみのみ數しせり

引ゆへせんとすれば味方雲霞の如くくく合たり進  
 て敵ハ向ちんとせむ上杉方要害に備えて鯨波をつ  
 くる進退まを窮まりて足並あさりにくるたる處を  
 見たり彌崎彌五郎生年十九歳血氣盛の若者の也眞  
 先小馬を駈出一鎗を取と突わけ登坂刑部少輔大  
 音あげ敵ハ小勢ありあけり川を越たり馬ハ物具もぬ  
 終たりせむをせむに打ち取と采配を振立ありた  
 て下知しけむ新津安田ハ止めらるるは迫りもえ  
 やわくせむと程ありれ大浪の打よひるが如く噓  
 とありゆへせむれハ森り手のめの散々ハ打まけ西の  
 岸へ逃上る各務落合兩人らあひてよりわけあると

思ひ故強く驚く色もあく鎗を横たへ逃る味方を延  
 追來る敵を防ぎたり森勝藏ハ味方ちや川を渡して  
 戦ひすてふ酣あらんよりの迄余所は扣ゆ心き繼けり  
 共と云より早く馬を飛して進みける處へ味方敗軍  
 崩れおのきをさしおの共我を手本よせよや  
 と鎗を打ちあひく駈たれく寄るをこそ大將の手を  
 して軍し給ふぞや誰りハ命をたふさるを爰よそ死  
 や人々と互にいせめられ又り返して戦へば上杉方  
 にせも是こそ大將よ森勝藏よあまのよと攻付たり  
 森が二の手の足輕とも筒先をさしむけく百餘人あも  
 ても振む打立をば上杉方矢庭よ五六十人うち倒され

く色めくを大塚主税森采女得たりやあふと聲切け無  
 二無三よ突く物じり上杉方よよくあされまどひ既ふ  
 此陣破られゆぐ見えし處へ蠣崎登坂夜又のどく荒  
 よあはれを狂ひ中をれば森が兵士散々よ切立られ  
 引色よ見えけまば森長一あま追勝たる軍あり何とて  
 まはれぬ見えたりとすく者どりと鞍乃上よ立上  
 りて下知まらる安田總八郎山岸右衛門ちり見付あ  
 れるを森勝藏よ遁をまじりと聲を止く駈寄我先よ突  
 立れら森が待ちも爰をせんど切合突合川の中より  
 追上追込火水よありて戦ふ中にも安田總八郎ハ大塚  
 主税と鎗を合を命を限りと突合くが安田右の高股

二箇處薄手を負わや危しと見えけるを安田筑前守  
第うとせて叶えんと馳合せて突つたる蠣崎彌五郎  
あはれを見と味方上鎗少ありつら引かくと聲を上げて  
突りくる森が軍兵猛けれども安田兄弟に打立られ合  
戦まもつる難義ありと聞えりバ遠藤大隅守伴久左  
衛門を呼近付りよ伴久左衛門志を我備を見あ  
わひく給ゆへ若き大將の軍の様見と参らんとたを  
りて三百餘騎大山北崩り如く押出たり上杉方に  
ても新津丹後守をを遠藤大隅守は是ハ美濃あて名  
を得し老兵を菓むりはでわあふまると手勢勝りて五  
百餘騎真黒よありて打合をたり森采女ハ新津を目よ

わけ横合より打つたか登坂刑部少輔を流し  
たり馬けよ采女を打んとせり合たり森ハ前後敵を  
うけ追つ返り戦ひくろが薄手負く引返を各務伊織入  
替りて討つたれバ落合も各務を助け續きたる丹後守  
ハさきもいふをいふ二人を左右よりけり切る廻りを登坂刑  
部少輔慮外あがると聲わけ鎗を合を各務落合をいよ  
疲せり是非あり左右へ物とれしを丹後守のさき  
と及びびより打つる太刀に落合右衛門をいよのすれを  
切れ馬より落るを郎等ども肩かけ引行登坂新津を  
せを見追んとす終水の中なるせせんうとあり終日の戦  
ひ双方牛角あして勝負つら終日と日とく久黄昏に及ハ

水中のよく浪急まりて足の立處も定まり終に兩陣左右ふ引つかれ東西の岸に駈あがり互に息を継ぎ明日まで見合せんと色代くその日此軍をもと止り上杉方に手負百三人打死五十七人さきども名は侍一人も那森が手に落合右衛門手を負いのほくもの外八十九人雑兵あり打死廿三人とかな上杉方の記録も森勝藏毛利河内守五千餘騎はく越後へ亂入せし處景勝妹婿上条民部少輔頼春七百餘騎はく打く出合戦し早馬あて越中へ注進を景勝これを聞くと先本國へ歸陣ありたる處信長生害のよりに森も毛利も信州へ引返るものち景勝信州へ打出とあり

重修真書太閤記八編卷之一終

重修真書太閤記八編卷之二

森勝藏上杉勢を敗る事

并上杉方諸將敗走の事

彼を知是を知りぬの必勝とら孫子の辭にて百戰百勝の術あり爰に森勝藏長一ハ柴田勝家加勢とて越後の國へ亂入し上杉の本城春日山を襲ふべしと勇々勇んぐ出張せしに上杉家も不識菴謙信の調練を名將勇士林の茂さが如く處々仕付置し斥侯の兵士昔のまじく小掟を守りて在けるはより小田切口の一戦利あく相引よ引けるを如何も残念ありと勝藏大に憤

發一諸將を集めて評定しける上杉侍の軍立尋常か  
 らば去バ昨日の戦味方あひひの外に利を失ひしを上  
 方の聞も口惜く傍輩の心の中も耻う、明日ハ長一  
 小勢を以て敵を欺さ川より此方へ誘引よを大返しよ  
 返し合を中に引包んで無二の一戦をあらむやと思ふ  
 らつりよ面々乃異見を聞かぬと怒り聲よ云出々せど  
 遠藤大隅守進出でて森殿の軍略實に然るべく聞えし  
 只仰の如く謙信十四歳の時より父の雛椎名神保なり  
 舎兄の仇ハ沼田父子三人あり是を討ねる男の道なく  
 びと思ひ立十六歳の時に國中の亂を切静め十八歳ふ  
 して家督を繼廿歳の時枋尾より府内へ入るれより三

条の城を攻て沼田常陸介を討廿二歳ありて沼田の子  
 共黒田金津を誅し廿九歳の時始て越中へ出馬し廿四  
 歳に越中松倉より出二箇處の城を攻落し放生津へ  
 打出神保長平椎名康種江浪三河守以下十六人を誅し  
 其首を梅檀野にかけ並べたり是時にいして父兄の仇  
 を復し多年の本懐を達して歸國ありこれより後弓矢  
 の勢震雷の如く兵士の利王猛虎の如く關八州を并吞  
 川中嶋四郡を争ひ北条を怖し武田を懲る其軍法の  
 正しく籌策の密あるも心も詞も及むれどさきバ昨日  
 の軍に新津蠣崎山岸登坂何れも花々敷働したる森殿の  
 謀略あり手軽く上杉勢を誘引出されんと抑りし





打く夜廻りけきど森が勢ど川をハ渡アらまども  
埋伏をべさ處をしら然どもあの終止へきまあど  
まび大塚と森とら左右に引分れ雁行に備えて鯨波を  
あげ上杉方の先鋒に向ふ鐵炮を打ちけきど上杉  
方にも敵ハのり川を渡しつるど油断せしその口  
惜さと聲々よかりき叫んで切掛れど森が勢も手軽く  
引揚んとかき終り火花を散り戦ひあくら操引よま  
そ引たりけれ上杉勢ハ昨日の軍に勝負つらむ相引よ  
引しを無念みおもひ處をまばをまや森勝藏打負  
て退くど一人も餘をまよと追掛るを新津丹後守安田  
筑前守かき制しけるら敵の軍立昨日よ切をれり子

細ぞあらん油断して不覺をとるあとのさむきども逸  
るる逸る若武者あれどまよも擬疑を馬を進め  
て一同に川へざんぶと乘込たり森が手の者逸足出  
る逃けるを上杉方みら實に敗きて逃るぞや遁をかく  
と鯨波を作りて追かけたる新津安田ハ氣をちせり引  
返して敵の鹽合を見よやと呼ちり川端よあり敷て  
味方を招く處へ森が手の兵士ども切ひて上杉勢の後  
よあせたりけるら嘯とおりまて掛出たり上杉勢ハか  
もひもよらひあらいつれ間よ爰まで敵の寄つらん實  
に油断しそらりと狼狽してまよ亂れたらんとか  
あかどもさびる謙信に引廻さきて古武者あり山岸右衛

門尉と名乗て真先に進み大塚各務を目よめけて切  
かゝる大塚各務のつて引退けが伴久左衛門関を  
作りつゝ鐵炮をつるべたおに放ちかけ面もあつた  
切かゝる上杉方敵を左右に受七轉八倒して戦ひ  
ける處へ森勝藏四百餘騎に取かへしきまらぬ  
く鐵炮を打つけ烟の絶まらぬ長柄の鎗をたき立  
ぞ進みたり礪崎彌五郎あつとまりまらぬ若者ど  
めは振舞や命ハ一つ名ハ万代引あくとをげま  
伴久左衛門に打かゝる安田筑前守これを見て敵の  
方便もや知たり馬を突くも絲落させ真中と打破ま  
と鞍上り突立上りて下知されバ日頃の詞もをげり

今日眼前の剛臆を敵味方に沙汰をらせ世の語よく  
さとなりかんとも口惜し逆も死る我身あり上方武士  
の肝をひきて呉をやと心々に思ひかへし森が新手  
にかけ向ふ實も越後の壯士ハ身も健骨も天晴  
天晴と安田も褒られいよく猛り振舞ひし森旗本  
崩れたち百餘騎をうりみ打たさる上杉勢もあつた  
く切かゝる大塚各務も命をかき受を味へし若  
めは共と主税伊織ハ左右に引かき鎗を取てかけ向  
ふ隙もあらきぬ合戦に安田の手者散々に打破られ  
右と左へ崩れたる礪崎彌五郎踏とまり進行味方を  
をらしめをのれらる何の世を頼も逃走る今日後

を見どりりどりの臆病めのを何とて屋形に扶持し給ふ  
へきぞ思ひひされやめの共よと大音聲よをけまひり  
獅子王の荒たる如く走り廻る上方勢もこれを見と類  
ひまどある勇士哉とありぬれあを無りも此上杉方  
まどに川端まで追詰られ總崩れ二崗並立を見て岸右  
衛門尉鎗を大地に突たて、爰を一足にとり引退さて  
ら長く弓矢の名を朽を我をさよや人々よと聲をあげ  
アとあり立當るを幸馬人のさうあもあく切て落して  
首を取突ちありてら馬を跳らを跳れら主も鞍より落  
ちり起しめたてばあを乍首をわさきさきなりか、子  
處へ安田筑前守馬を飛しを馳うくさいつまそ命をく

しむぞや早戦死せよやと手負し猪の荒るが如く走り  
廻れ、越後勢まうと氣力をまう盛かへしく右に當り左  
に拂ひけるが山岸右衛門の大塚とさし向ひ十文字の  
鎗と大身の鎗電の如く突合たるがわらわわいけん山  
岸が鎗は十文字大塚の鞍をかきまて動うねハ鎗あげ  
まて大刀を抜き切るめらるを大塚えい中と踏込で突  
ちあやまらば山岸が胸板突貫れ終に馬より落さけり  
蠣崎彌五郎りと見と馬を跳らを大塚に走か、るを  
榊が侍西尾伊三郎彦坂銅助わけよりて生捕るをんと  
組付を彌五郎りの鞍ともせぬ捻倒し上よりうんと  
押付れら西尾彦坂二言といをそ其息絶死してなり

大朝臣八編卷二

六

然とも彌五郎立ちあがらぬ是も同く倒さる安田  
筑前守をうけ見つけ鞭と鐙を合を走寄彌五郎を引  
起せば手も負ひつゝよせしむと尋ねば西尾彦坂を押  
併し時陰囊を吐く蹴れどをのびのけの氣の遠くあり  
くなりと打笑ひ跳り上るくあつてび馬に打乗ば安田  
も喜び猶も打連持さるり安田惣次郎崩る味方を助  
けつゝ静々と引つゝを森勝藏と見付ふれ安田  
總次郎能敵あり我討取んと大長刀を打り只一もぬ  
あつて切てわくる伐總次郎振かへり推参ありと云ふ  
に大刀を以て切拂へば森が馬の平頭三寸むり切下  
たり馬を手を負狂ひまはせど主はあつてと鞍に居て

鐙ろろ長刀取あを又難わあを太刀に拂ひ  
太刀をかざし切うるを以て開き難ふさる双方  
上手の若武者が軍さる様よに類あく見えてなり然ど  
も森が運や強うりけん安田が流よく打太刀をそつと  
外して空を切を其隙に安田が横腹を上様よまぐひけ  
ばら總次郎鞍に居らば馬より落あつれば森が郎等走  
より終に首を取るり安田討きて上杉勢立足もあく  
敗走也

遠藤大隅守奇計の事

并登坂安田美戦々死の事

上杉方森が伏勢よわけあまされ山岸右衛門安田總

次郎戦死し々々総軍崩立一人も残らば討るべ  
 かりける處に安田筑前守を救ひもつり味方を援  
 けし川を打つり東の岸よりあきたる味方の陣へ走  
 入て息を繼後陣に扣えし新津丹後守登坂刑部少輔を  
 遠く味方の旗を守り居たりとあり初ハ西にありし旗  
 うりりし東にありしを中めし西とあり東みおくりし  
 かな然ら兩陣入亂れし軍ありと覺えたり斯に待も  
 心苦しいざや今少し押出して勝負を見んとありたる  
 處よあもひもよらば松原のあまより黒烟天を焦し  
 燃立たり是ハそも在家の民が手過りと見るうち次  
 弟に焼幕りける猛火の下より鬨をつくり鐵炮を放し

かけ月一星の旗ありたて五六百騎かやどおし出た  
 新津丹後守をみ見たりとあり登坂どのあまら美濃  
 にて名を得し遠藤と覺ゆるなりしつりけりど小斯まで  
 寄たりけん随分味方に用心せしめありたるを今日  
 敗軍の兆ありやとハ我等が死すべき時ぞ御邊と我等  
 と生きたる月日と替はれども死ハ共し今月今日不思議か  
 りける契りあ御先仕る御免あま刑部どのとつひも  
 果ねし馬駈出し十三束三伏の鳥獵矢取と打番ひ切て  
 ハ放し切らるるを矢庭に三十餘人射たはせし刑部  
 ら鎌鎗を多くと打ありし四方八面に突立れば遠藤か  
 手の侍ともまあり白けく見えける處へ馬烟を蹴たて

馳來る勢あり是ハ誰と能々見れど先ハ川を越と敵を  
 追却く敵ハ敗られし味方の勢あり遠藤ハ新津登坂を  
 餘さずと探よりあど攻付れど新津登坂も今日を限と  
 と戦ふより互ハ打合太刀の鋒より火を出せば鏝も碎  
 けよ目貫ハ折よとせり付く切合ふも修羅帝釋の争  
 ひも是より過とありを越より實や年來鍛錬を越  
 後武士と碌磨の功を積たりし上方武者命らありま  
 名を惜む森勝藏長一ハ川を渡りて馳來り大塚伴を前  
 後ハ立昨日の耻を雪ぐんと透間もあつと責來る安  
 田登坂敵を左右ハ引受あがらちもひるまの戦あり  
 ちハ安田と登坂たゞ二人髪をさだして顔よりかけ

流る血はく面を汚し森ハ遠藤ハ近付てこれを討ん  
 とゆらひけり新津丹後守彌崎彌五郎を待つけ今よ  
 生ハかあき也のぞらら葉武者を切く何うせん森  
 勝藏ハ近付ハ組て落く首をとれ縦令手にあまらハ落  
 めるあらん構へく心ハ掛よと示し合息を勞さどと  
 走りくる伴久左衛門ハ新津を目にわけ大太刀を真向  
 にあてて撃つるを丹後守莞爾と笑く久左衛門を去  
 を退くと四尺二寸の仁王清春だひらあるを振めどし  
 只一刀と拂ひ切あを切たりなり彌崎をるうみ是を見  
 る天晴伴の久左衛門さきくら打漏しつるう今退さ  
 くと走來り右手の肩先より肋をわけてくくと突ハ鬼

神を欺く久左衛門尉と仰よるを丹後守  
 太刀をあり上と首と打との戦は森が從兵亂立乍一  
 条の道を開きさるる小より蠣崎も新津もあつたをぐ切ぬ  
 け東をさして引く行森勝藏あつたを見くあを最惜や伴  
 久左衛門尉武勇といひ智謀といひ尋常あつたぬりのな  
 いか運の窮めは哀しきよせをて骸かくせよと傍に  
 引取一堆の塚乃主とてありてなりあれを見くは此難  
 有森が志やわくる大將の下に立りの誰りハ命を惜む  
 べきと余所の袖をせぬしと遠藤と森采女といハ安  
 田筑前守登坂刑部少輔と追つ追れハ戦ひくもり安田  
 ハ古兵の打物達者突くわくる鎗を切折真向さして射

る矢をハ拂落し花かくけハ戦ふを森勝藏とつと見く味  
 方に取くハ能武者ありら敵とつハ悪き安田あれハ大勢り  
 中よ取込打く取中と下知もつバ大塚主税各務伊織くけ  
 給えつと返辭くハ三百餘騎むらくむらとをりりりり  
 安田主從十三騎を中よ取あめ一揉めんくさつと引ハ百  
 騎ハろとつと五十騎ハ手を負つ安田も七騎うたつと  
 たハ六騎死りハ狂ひハ狂ひハ狂ひハ狂ひハ狂ひハ狂ひハ  
 ぞとさたり真一文字ハ安田ハ切りハ安田ハ采女ハ笠よ志  
 るハ見くあれハ森が一族ありハ願ふ處ハ飛わつと無  
 手と組ハ兩馬の間よとと落筑前守ハ大力あり森を取  
 と押え膝よ引く首をめんとあつた時よ采女ハ

や業心さうて下より刀を拔出し安田の腰をさりと突けられ  
 る少しゆるむ處を刎切し上に乗めり遂に首を切り落  
 を安田うたせり此手いさして破さるなり登坂刑部少輔ハ  
 た鎌の鎗を打り前後左右に突たり猛虎の如くあれま  
 ろりいかに森が手のみ此多く討ち流る血混々として  
 杵をもちたよけしつと倒れ屍ハ箒をさだしておびた  
 相従ふ兵士七十三騎のつとむる名を得しりのあれど駈  
 して返し返して駈東西南北を廻りしむらうとも  
 見えばこそされどもその身鐵石にもあらずせむ五十餘  
 騎いらや討れ残るはなづらう二十餘騎真丸よそあて登  
 坂刑部が最期のつとさ成能々見覺のち手本にせよや

と大音よのじ廻りて戦へば森勝藏あをれ敵やいど討取  
 手柄あをを中と例の長刀水車よ廻してあてり刑部ハ  
 森と見あうりも願ふ處と大に喜び御大將にけりあはれ上  
 杉り侍は登坂刑部少輔國繼あてり見參せんと名乗りけ鎌  
 鎗とりて突くる勝藏あまを聞きしも景勝が侍あらば長  
 一よハあをね敵で罷り退け慮外めのと怒り聲を叫り付猶  
 もあらん長刀を打りし進まけまど刑部少輔縮商人の三  
 左衛門が悴めが分外の言を聞りのか刑部が鎗先受て見  
 よりとささるるとさ穂先の稲妻よ勝藏りり危ふき處は遠藤  
 大隅守が切くもねを殺弓よ登坂弓手の肩を射られしハ  
 刑部まろりひらんと見えたるを勝藏得たりと踏込く



まゝ打拂ふ長刀は刑部膝口まゝに切られ馬より下へ落  
けられ勝藏飛をり遂に首をとりつゝ登坂刑部  
少輔今年四十三歳遠藤が箭よあたらば森もやんと討るべ  
しを軍の運ぞ是非もあらず勝藏登坂を討取く是は上杉方  
も名譽のゆゑ也新津蠣崎を討りしを安田筑前山岸右衛  
門つゞきも空き侍あるを今日の軍に討つるは味方に取く大  
たる仕合あて上杉方の不運あり此勢は奥深く攻入て春日山  
あつめん勇まふのきんぞ進み上杉方ハ力をあつ  
角て軍をうぐりしつと七里引退く陣をとり春日山へ  
注進櫛の齒を引かざり

重修真書太閤記八編卷之二終

重修真書太閤記八編卷之三

上杉景勝魚津表歸陣の事

并馬淵浮見又傷始末の事

天正十年五月信州越後の堺ある小田切口の合戦を  
めハ森勝藏敗軍をが如くかりしも遠藤大隅守の計  
策ありて終に勝利を得上杉方あま名ある物頭山岸  
右衛門尉安田筑前守登坂刑部少輔あど戦死せしよ  
了越後方大よ力を落し新津丹後守蠣崎彌五郎あんと  
心々猛しといへども敗軍小引立ち中田畑より東を  
さして落たりしかば森勝藏遠藤大隅守此勢に乘り上

杉の本城春日山へ打入べしと其評定まありあり  
 今此古戦場を考ふるに關川より十餘町ありて化粧  
 坂新田といふ所れより廿町余にして小田切あり白  
 田切坂を越谷川をこり二俣村熊戸村大田切川大  
 田切坂大田切田切新田小野澤村關山驛ありこれ迄  
 關川より三里あり關山より一里半ありて松崎一里  
 廿九町ありて新井二里半ありて高田一里ありて中  
 屋敷これ春日山の持屋敷あり關川より通計十里と  
 云然も軍行二日路なり  
 新津丹後守蠣崎彌五郎等ハ敗軍を集め平負を勞り防  
 戦の用意とあすといふども國中人氣騷立ち催促不應

ざるもの甚以て無勢ありかくては始終如何と思案  
 敵陣を引去と七里に陣を取春日山へ注進せり春  
 日山の留守居鉄上野介杉原常陸介岡野左内本莊出羽  
 守父子以下大に驚き越中國の軍のまご勝負決着せ  
 然る處小信州の森勝藏寄來るまごに關川を打越小田  
 切大田切の境に亂入する由あり然る當城迄無下小程  
 近し早く人數をさし向く新津蠣崎に加勢を乞ひ誰  
 罷向ふく信州勢と追拂ひ申べさや面々の意見と承を  
 ぞ申べくゆと云か甘糟近江守清滿進出く申なる様  
 蒲原郡の新發田治時いまご平均せびゆへバ古志三鳴  
 新羽魚沼の衆ハ出陣定め難義ふか不さるべし依て

誰彼と申に及む其罷向ひ中べいと申さるるあり鉄  
 杉原以下何も大に悦び然も佐藤平右衛門尉を差添中  
 へきに評定一決甘槽近江守布施次郎左衛門志賀與  
 三左衛門三千七百餘騎を卒し小田切口をさして發向  
 ひ又越中國天神山あぐ柴田勝家前田佐々合戦を  
 あし隙をかりける處へ小田切口の軍大に破れ敵國  
 中へ亂入しひのち山岸登坂安田等の歴々多く  
 戦死せし由を聞れ景勝大に驚き當家越後の國を治免  
 一より以來本國へ敵を入し例なく景勝家督の今に至  
 て春日山近くまで敵を入立んと末代まごの耻辱あり  
 切は此處を棄置一先本國へ引返しとて宮崎と勢

を遺し魚津の加勢と其身ハ天神山を引拂ひ本國さ  
 して歸陣あり此事魚津城中へも遣ちし吉江  
 兄弟河田豊前守中条寺嶋龜田藤丸山本竹股若林等の  
 人々寄集りいりあも小田切口の軍破れと敵國中へ亂  
 入せんを疑ひあし左も有んは魚津の城の如き二箇  
 處も三箇處もゆへ打棄れ歸陣あらんと尤其理不當  
 て覺えゆ夫に宮崎に加勢の衆を残し置しゆを大將の  
 心中實に察し入るゆたり我等ハ元來此城あく魁も角  
 もありゆとんと初より思ひ切てゆへ大將の御坐ま  
 すと御坐まさるるといよりて志を變れ可中哉織田方  
 の勢たとひ如何様ふせゆ共鎗長刀の目釘矢種玉藥

のあらん内々虫一つあても織田方よりハ入ヤまド叶  
 ぬ時々花々敷一戦して潔く戦死して日頃の君恩不  
 報まへさありと勇氣凛々として見えてたり寄手の大  
 將柴田勝家ハ小田切口の軍に味方打勝し由を聞きて  
 荒武者とせよ知まじ森の小冠者め先を取まじと  
 の口惜さよ信濃侍が越後へ容易く亂入せしに我等越  
 中の小城に支えられ越後堺にたも入得ぬものや  
 一さよ景勝の天神山を引拂ひしを以て思へば實に春  
 日山近く森の小悴めが打入りあらん然らば當城を一時  
 攻め攻落し一刻も早く春日山に打入り悴め鼻明せ  
 んと怒り天正十年五月廿九日前田又左衛門父子を宮

崎の押ささしむけ佐々内藏助ハ本陣の兵糧を守らせ  
 勝家た一手二千八百餘騎魚津の大手にかし寄て關  
 を作る城中あてもあかしく鯨波を合を鐵炮を放ち黒  
 烟の内より矢繼早し射出し手痛く防ぎ戦ひたるはよ  
 了寄手三百餘人討ちて城ハよける色もなり四月をド  
 めより五十餘日み餘る籠城あれば兵糧も今ハ盡ぬ危  
 しと思ひしに其氣色も見えざりささるは勝家ハ責  
 づくみ此城の体をうるに力攻めくハ士卒を損ずる計  
 づく其詮あるべかり爰は一つの奇計あり是を用ひ  
 て見むやと思案し早々引螺を吹く軍勢を引上本陣さ  
 して引退を吉江兄弟が勇氣屈をば河田豊前守が義心

龜田小三郎が忠信のつづきも天下小類ひまきある侍か  
まば鬼といわれ勝家も案に相違たりなり抑勝  
家が近習は浮見小才次といふ者あり小身あれ共武邊  
の心掛厚く万事たしあま深かりしうは主の覺も他小  
殊ありさまと浮見が傍輩小馬淵又市といふりの小才  
次と無二の親を結び兄弟よりも猶心ありぬ中の交か  
ま然るにこの頃又市仁王清眞の太刀を求め得て試し  
見る小無双の切物あり二胴のつよよ及む立木横竹  
何あくも手に覺えなく切られ秘藏かさくなく天晴  
るざりの近日出陣あらば随分手柄をあらをまべられ  
と心は満ちて居たりなり或日馬淵と浮見と出會せし

折節の挨拶をとり又市小才次よりなるらあ程仁王  
の太刀を求め得る寸ハ二尺八寸砥かど少く鐵色  
うつくしく試すゆふ心のゆるぬ際もあしと語れば小  
才次あきりに羨そ夫ハ一段の事あり武士の心掛ハ一  
に物具ニハ太刀三に馬とすてゆへども太刀を以て  
一と殊寸もよくゆ某とも同し心親々より持傳  
えゆ品に事かくとゆにゆをぬとも猶厭たらぬ心  
にや何りあとかりハ欲ハ絶むゆあをれ一見仕ゆも  
申といふ又市も子細ゆも明日御覽入可申とて行  
るるは頭も其日ありしうハ小才次又市が宅へ行向  
ひ案内して坐敷も通り一往の辭義終りける時又市刀

本間記八編卷三

を取出し小才次が前に置小才次取りてかゝりてさ  
 半ぬさそ是を見るに沸の心をさし此葉の上は薄雪の  
 ありかゝりたる如く地青く又ハ白くよふ美事ある作  
 めれば小才次あゝるわ色ぐとそ是を抜ちあゝ立  
 見横よ見打もたささび守りたる又市も我刀を親女の  
 かくまぐに褒るを喜び扱も打見より又切味のよあ  
 さと此間二胴を試してゆり手答へもあく切放し砂ま  
 て六七寸も打入さゆとゆい小才次太刀を弓手に取  
 直しゆりにゆく無うゆくと云つて暫見とせ居たり  
 けり見ゆけ見あろ手手に取て詠めり思をば知む  
 又市も真額より臍はは迫切割たれば哀むべし馬淵又

市二つにありてそのまゝ息ハ絶たりたり小才次も大  
 驚きこそえゆふ誤たり如何にせんと十方に暮け  
 る處へ馬淵若黨藤堂與一主の敵のかさどと切掛る  
 小才次聲かけゆれあゝる云とゆりゆりども更に聞  
 入む主を討し浮見小才次何を聞んと又切あするを  
 拂ひのけ引つ返しゆあゝる内よ柴田家の大目付  
 中村與右衛門駈來り事の始末を聞紉し兼るも知たる  
 浮見と馬淵の懇意の中也何とて是を討果はる遺恨  
 のあらん何さま太刀に見ゆれ思をぬ誤それを仇と  
 藤堂り打も理さりあゝる我等り見てこのまゝに其  
 方り主の仇を討をがし打ハ何時にてもある事よ一

先殿へ言上し殿の御さし圖に任をせしむるとして小才次  
 を召連中村與右衛門を登城したりたり  
 仁王清真の銘盡に仁王三郎と號を龜山院文永建治  
 弘安の頃のゆは也と云ふ又後堀川院御宇寛喜の頃周  
 防國住人と云ふ然るに近き頃の鑒定家の説は周防  
 の清真の建武前まゝ清忠の子の清真と貞和の頃ま  
 た永正の頃にもありと云ふ馬淵又市が求得たる清真  
 の何の作り知べからぬ  
 柴田勝家奇計を用ふる事  
 并溝口半左衛門使節の事  
 浮見小才次馬淵又市所持仁王清真の太刀を一覽し

あれを賞翫の餘に誤り又市を刃傷せしを實に以て珍  
 事とつゝべくまゝ刀剣に就て袂災と云ふ又市が臣  
 藤堂與一こそを見よ小才次を討棄んとせしも眼前主  
 を討しりの也更し猶豫まぐらざる理あり元より  
 主と小才次と無二の信友とつひ遺恨の勿論當坐の意  
 趣もなかり仇にしく仇あしめさき理もある故に中村  
 與右衛門これを勝家に披露しけるに勝家これを聞て  
 何れも浮見と馬淵と同役にして入魂なるを我も知  
 りも定りて知つらん何の意趣も恨も有べきつを終を  
 是に全く二王の刀のあを業あらん去はては勝家  
 身も命も代らんとつゝ忠義の又市を誤るこれを

殺しつゝさく大事の前の損あるに今まゝ小才次小腹  
切せしハ勝家が損を重ねる道理也本とて又市ハ妻子  
家來の心も不便なり一人も残さば呼寄ふとて馬淵ハ  
妻子所從親屬をとりく勝家が前に呼ばる勝家おもて  
を和け扱も不慮の事にと其方どもの心中あらく察し  
入たりたゞ又市を失ふさへ勝家が身に取ら大さを  
る損なるに小才次まで腹切まらる其方共取せ討  
せしハ又勝家ハ損を増道理あり依て又市を討し小才  
次を我ハ兵よたゞハ夫にせハ勝家ひのきの沙汰とい  
えれんよりて浮見ハ所領ハ云ふ及むば家財雜具を  
べく馬淵ハ取らるたれば兩家を一家にすて又市ハ

子息に家督をすむべし其上小才次を勝家が側小置  
城より外へ出せしと云々れば馬淵ハ親屬中なる様  
如何あも又市小才次ハ討れくゆへに小才次を切さ  
とゆゆふ若まハ戰場に討せしゆゆゆ誰を仇と  
中づき鬼も角にを殿に奉り命也殿のさゆと仰  
られんハ誰ハ心を残さぬき勿体ありとて請して退出  
しられハ勝家大ハ喜び小才次を側ハ呼ばる又市ハ悴  
に汝ハ知行を與えて汝ハ命を贖ひつぎ今ハ心安し  
されども勝家ハ側をもちあさるべくさるとて手元ハ召仕  
せけるハ誤といひあがら無二の朋友を手に切け其  
方ハ刀脇指をもちあさるべくさるとて刀剣をばさるべ



然るに今度この陣中にめしつきたりくれど此小才次  
を以て一方便まぐりたるも使者を遣はして事の  
様を見たりとて溝口半左衛門を魚津の城へ遣はしけ  
る半左衛門ハ草履取一人ハ小童一人ハ具しつて城門  
にいりて是ハ柴田修理進侍ハ溝口半左衛門と申す  
のめく勝家より城の大將より入り子細あるハ因て伺  
候しつてゆとりなれば吉江兄弟河田豊前守竹股三河  
守龜田小三郎名田采女正横田常陸介參會して勝家よ  
り使者をさし越たり是を呼入る事の子細を聞きたらん  
も武士の道にあつたる軍中ハ使者の禮儀ありそ  
の人によりて式作法あるハ溝口半左衛門如何体の

身分めや是を知人ありや如何とひひられ河田豊前  
守龜田小三郎二人言葉をとりつてけりハ使者の身  
分ハ我知れざるあがら勝家の使者と名乗めりハ勝  
家と同様ハ取扱ふべしとてこの使者の趣を一應門  
外より子細ハ尋ねその次第はうりてまゝ取扱ひし  
べしとて竹股寺嶋を聞河田殿龜田殿の御了簡  
まゝまゝ覚えゆりつぎにも門外ありて事の様を尋ね  
て後のとより然るべしと申ければ横田常陸介何さ  
まゝの趣當前の事と存ゆ然ハ某罷向ひ承をり可なり  
とて横田大手の門ハ立出是ハ當城を預り上杉侍の  
内あり末席なる横田常陸と申すのハ上坐あり吉江

兄弟のりのゆら柴田殿より御使者を立られの事何  
の御用にゆりこのゆら弓箭を取て雌雄を争ふ際  
ゆら御使の趣を荒増承よりゆら上りて御面會トべく  
ゆらゆらに因る某爰迄罷出ゆらゆら半左衛門門の際  
ゆらゆらと打より如何にも双方楯を突竹束をあら  
日夜の勝敗を争ひゆら時あるゆら使者を参らゆら事の御  
不審尤も存ゆら去あぐら勝家ヲ付ゆら魚津の城ハ上杉  
方ゆら弓箭巧者と世も沙汰仕る吉江殿ヲ持ゆらゆら合  
ゆら此程度々參會仕ゆらゆらゆら城方ゆらゆら勝家手勢  
多く討ゆらゆら夫も付上方よりゆら越れゆら吉趣を吉江殿  
ゆら試ゆらゆらゆら半左衛門を使に立てゆら横田殿吉江

殿と優る劣りの有まゆらゆらゆら吉江殿よりゆらゆら  
口状を横田殿よりゆらゆらさんを勝家ヲ付ゆら吉に相違ゆ  
まゆら上方よりゆらゆらせば右大臣殿の仰也ゆらゆらゆら  
あゆらゆらゆら理もあゆらゆら但使者ハ使者の禮儀ゆら主  
人ゆら主人の作法ゆらゆらゆらゆら横田立歸り吉江  
ゆらゆらと告げゆら吉江暫く案ト何ゆらゆらゆらゆら使者に面  
會せざらんハ無骨ゆら然ハ是へ御入ゆらゆらゆら横田を案  
内ゆら出ゆらゆら溝口横田ゆらゆらゆら本丸ゆら入書院に通  
り客坐に付ハ床ゆら置鳥置鯉ゆらゆら大臣殿を迎元奉  
り禮を設け然して城の本人吉江兄弟直垂上下の出  
立ゆら主人の坐よりゆらゆら下りてゆらあまは是ら景勝

城主也吉江ハ城の主ありて云々をあらわす  
 多へ半左衛門開小坐小著一禮畢してやうるハ右大  
 臣家の御口状よりゆへども取傳ゆら柴田修理進小  
 て其柴田の家臣溝口半左衛門あり然るに御坐席の体  
 ハ大臣家御成の御設けと拜見仕りてハ半左衛門式の  
 罷出へさ御結構と見奉らば何事ぞ著坐仕るべき  
 御指南頼入とゆと慇懃と述べら横田のさより溝  
 口との左様み仰られゆて果しぬ今日ハ半左衛  
 門殿を柴田殿と心得ゆ柴田殿右大臣家の御名代  
 と存ゆゆより城中不調に憚入とゆへども形むか  
 さいさ、か支度仕りゆ彼是と御會釋あく件の坐敷に

御着ゆづくハ箭王の飛かきゆよ引かきりか様と長  
 閑く御對坐仕りゆ事世ハ珍敷事小ハ早々御坐と御直  
 のへと勧めければ半左衛門御亭主方の御心入ゆりと  
 ら穩しき御振舞に近頃痛入とゆ修理心にも定め  
 て荒々敷御舉動やゆをんぢんと存ゆよ品かきりか  
 うる御りとぬしやとよ耻入とゆ某あど都近く生立ゆ  
 へども武家の進退禮節更ハ覺悟不仕かくの如き御坐  
 敷に始て罷出ゆと云るら横田の指南の坐に著ら駭  
 斗毘布の引きし搗栗の手掛作法とさぎ引ありべ  
 てのち吉江兄弟一禮をとり右大臣家とゆを天下の  
 執柄とすし其仰とらさバ取も直さば論言と比へ

ヤベ〜吾等ハ陪臣以てゆへに論言を蒙るべき身ゆゑ  
ゆゑに但態と御入のゆを御請不ゆの失禮ゆゆりて  
如此の式まぐよ及びゆ如何ある御事にゆり覺束あく  
ゆとゆけきぐ半左衛門さんゆ此度右府の仰ハ管領入  
道去天正六年又辛未の後四年に及びゆ景勝上京の沙  
汰あく自由に國務を執行いたさきゆ条朝廷を蔑如と  
らまゆみあふむゆ此事を問糾さんゆ爲ゆ使者と差下  
ゆゆへに堀目に城をかまへ籠城又及むれゆ弓矢取  
身の習あれバ一應ハ合戦をゆてゆへども早く景  
勝上京ゆりて朝家の公事怠慢あく御勤めあるべくゆ  
この事にゆゆれバ吉江兄弟承をり御使者の口状た

一ゆ心得てゆた〜我等ハ景勝が郎等にゆ景勝へ  
ゆてのち左も右も御答ゆべくゆとてまぐ半左衛門を  
ゆ一問へ通ゆ休息させゆけり

太閤記ノ終

重修真書太閤記八編卷之三終

重修真書

三編

